

都道府県別賞一等

家族の幸せと生命保険

千葉県 我孫子市立白山中学校 三学年

長潟 航

自分には八つ歳上の従姉のお姉さんがいる。とても優しい。そのお姉さんは小学生の頃に、祖母がしばしば体調を崩して辛そうにしている姿を見て、少しでも楽にしたいと思い、なんでも治る魔法の薬を作ることが小さい頃の夢だった。それができないならば、何かあってもすぐに診てあげられるようにとお医者さんを目指すことに決めたそうだ。

その祖母は自分の祖母でもあるわけだが、お姉さんもそうであるように、自分にとっても大切な存在だ。自分達が小さい時からいつも近くにおいて、優しくお世話をしてくれた。塾の帰りに駅まで迎えに来てくれたり、一緒に旅行に連れていってくれたりなど、とにかくよく気を遣ってくれた。

その祖母の作ってくれる料理はとても美味しい。ハヤシライス、ハンバーグ、おいなりさん等々どれをとっても本当に美味しい。僕達の好みの味をよく知っている。

そんな大好きな祖母が、ある時入院してしまった。それは足の関節がとても痛くなり、しゃがむだけで激痛が走ったり、痛くて眠れない夜もあったと言う。容態は日に日に悪化していった。もう我慢ができないくらいになってしまったため、手術を受けなければならぬのだと言った。

僕にとっては、とても心配な出来事だが、何もしてあげられない。そんな時、生命保険会社から一通の封筒が届いた。祖父が言うには、今回の入院や手術をすることで色々と費用が掛かるのだが、それを補うために給付金が貰えるそう

だ。
自分は生命保険は人が亡くなった時に、保険金が支払われるものだと思っていた。『悲しみと引き換えに保険金が支払われても何か複雑な気持ちだな』と思っていたが、このような時にも給付金が支払われるというのは驚きだった。それどころか、自分にも学資準備のための保険が掛けられていて、大学入試の時に合わせてお金が支払われるそうだ。生命保険には色々な役割があることを初めて知った。

その封筒には丁寧なお見舞いと共に、給付金請求の書類の書き方が同封されていた。さらに新型コロナウイルスに感染してしまい、自宅隔離されても、給付金が支払われるというチラシも入っていた。ますます生命保険の守備範囲は広いなと感心した。

第59回中学生作文コンクール

祖母は手術が終われば退院できる。そして三カ月くらい経つと、痛みが消えて今までのように元気になるそうだ。得意な社交ダンスもできるようになると、祖父から説明を聞いて少し安心した。手術は大変だし心配だが、その後また祖母が元気になれると考えたらずいだけ前向きな気持ちになれた。

「長い間、保険料を支払ってきたけれど、給付金は初めて貰うね。」

ふと、祖父が言った。僕は不思議な気持ちになった。何故なら生命保険は、損なのか得なのかとの疑問が湧いたからだ。そこで祖父に質問してみた。すると、「そうだね、難しい質問だね。だけど給付金を貰えないということは、家族が健康で幸せで長生きしているということだから、それで良いんじゃないかな。」と祖父は優しく教えてくれた。『そうか、反対に給付金が支払われる時が来ない方が幸福なのだし、自分もその方が良いな。』と思った。

従姉のお姉さんは今、医大の五年生になっている。そして、あと少し経つとお医者さんになるだろう。そうしたら大切な祖父や祖母を誰よりも側にいて誰よりも詳しく、そして一生懸命健康を管理してくれるだろう。

お姉さんと生命保険が、自分達家族の毎日の生活を守ってくれている。保険も家族の愛情も目には見えないものだが、無くてはならない大切なものだと思っ